
フェミニックマシン

NAOGON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェミニックマシン

【Nコード】

N0232I

【作者名】

NAOGON

【あらすじ】

仮想体感ソフト制作総合会社BACに勤務する岡田直樹は同期の逢坂由美の陰謀により男性去勢プログラムフェミニックを装着され徐々に去勢化女性化していく、会社では彼を性同一障害と判定し女性だけの部署企画2課へ強制出向を命じられる。

ブローグ

とあるオフィスの一室、頭部にフルフェイス型のヘッドセットをした男が

一人椅子に拘束され、座らせられている。ヘッドセットは無数のコードで

接続され、複数の端末機器へとつながっている、そして10台ほどのモニターが部屋の壁一面を覆いつくしている。そのモニターを監視していた

5人の女性のうち、一人の女性がヘッドセットをした男の側に寄った。

手入れのいい長い黒髪をなびかせ、黒のシックなパンツスーツの女性性は

男のヘッドセットをはずして、男の顔色を見て言った。

「岡田君、どう？考え直してくれたかしら？」

岡田直樹 男性 25歳、コンピューターバーチャルソフト開発
総合企業

BACの企画営業部部长、女は同じ企画営業部2課、女性向けソフト開発

専門の部署の部長 逢坂 由美26歳、他の4名の女性は皆、企画
営業部2課の営業部員、BACでは架空立体映像体感ソフトの製作
をトー

タルにプロデュースしており、その活動は一般家庭向けゲームソフトから

企業向け教育ソフトまで多種多様に渡った活動をしている。

岡田は下着姿でパンツ1枚の恥辱的姿で椅子に拘束されていた、彼は今期の新商品開発プレゼンにおいて、最新戦争体感シュミレー

ション

ゲームソフトを提案し、企業重役陣の承認を得て企画採用されたばかり

だった。企画2課では独身女性向けバーチャルセックス体感ソフトを提案

したのだが、ソフトに欠陥があるとの理由で企画は却下されてしまった。

由美は岡田を激励の名目で居酒屋に呼び出し、酒の弱い岡田に

強引に酒を薦め、酔いつぶれた岡田をBAC会社内商品企画実験室に拘禁

し、実験段階の女性教育用体感ソフトを装着させたのだ、このソフトは結婚

準備段階の女性を更に女性的に教育しなおし、女性ホルモンの促進を促す

ソフトなのだが男性が使用すると、虚勢化プログラムとして作用し、男性を

女性化させてしまう、フェミニックと名づけられたこのソフトは男性性が

使用した場合、徐々に精神から女性化していき、やがて自ら性転換の意思を確立

してしまうのだ。

岡田は伏せ目がちにゆっくりと話し始めた。

「ごめんなさい、わたしが間違っていました、由美さん、わたしの企画は

取り下げます。これからはわたし、由美さんについて行こうかと思っています。

わたしを企画第2課に入れてください。おねえさま。」

女性的なトーンで話し、しかも目に薄っすら涙を溜めている岡田、少し震えて

いる。

今日からOL

涙を流してうつむいた岡田を抱き寄せる逢坂、

「さっ、涙を拭くのよ、岡田さん、今日からあなたはもう開発営業2課の仲間よ」

周りにいた4名の女性も岡田を取り囲み拍手をする。

「おめでとう、岡田さん、一緒に頑張りましょう」

「菅野と中山、岡田さんの制服を合わせてあげて、それから美容院に連れてって

髪のカットを、そうね、菅野さんあなたと同じようなショートボブにしてもらって、

男にしては長めのヘアだったから丁度いいでしょ、」

岡田の涙をハンカチで拭き髪を撫でている逢坂、

「これから、メイクしてもらうのに、泣いていたのでは台無しになってしまうわ、困った

娘ね、直子は」

「ごめんなさい、わたしったら、泣き虫で・・・」

「じゃ、直子を連れて出掛けます、途中で女性用の下着とか化粧品なんかも購入して

来ますので、戻るのは6時くらいになりますけどお願いします。」

菅野が岡田を連れて社を後にした。

彼女等の魔の手に掛かった男性社員は去勢され女性化していく、しかし社員の8割が

女性のこの会社は社長も女性で、このようなケースになった男性社員は性同一障害

ということ、女性社員扱いされ、仕事も降格して入社したばかり

の女性社員と同じ

ポジションになるが、ほとんどの女性化した社員は異論を唱えないでいた。

あくる朝、

「おはようございます」

丁寧にお辞儀をしながらオフィスに入ってくる女性、いや女性の制服に身を包みヘアも

ショートボブにし、ナチュラルメイクをした岡田が開発営業2課に
出社したのだ、岡田は

営業課長に自分が立案した架空戦争体感ソフトの訂正のため投稿を
取り下げにすることを

宣言し、自ら開発営業2課への出向を希望した。

あまりの岡田の変わりように驚いた課長 島は動揺したが、まだ、
幾分男の面影が残る

岡田に正直な気持ちを言った。

「そうか、残念だな、君のプレゼン面白かったのにな、新企画は2
課の逢坂君に譲ることに

なるけどいいんだね、それから、君、2課への出向を希望したんだ
そうだね、君も性同一

障害なのか？ いや、なってしまったのか？社長も専務も性同一障
害には寛大だ、なんせ

女性だからな、お二人とも、2課への出向は大賛成だそうだ、でも
どうなのだ？今のポジを

捨て、普通のOL 女の世界へ入っていききたいのか？あれほど豪気
で後輩から慕われ

男らしかった君が、女の世界へ・・・まだ俺は信じられん、君が望む
のであれば仕方ないが、」

片手で髪を掻き分け撫で付ける、自然と女性の仕草が出る岡田、

「ごめんなさい、これがほんとうのわたしなんです。課長、子供の時から自分の性に嫌悪感があって、自分は心は女の子なのに どうして？って思ってたんです。どうしてって・・・」

少しベソの入った岡田を逢坂が迎えに来た、

「もういいのよ、直子、これからは自分に正直に生きればいいのよ、今までのことは忘れましょう」

一から女として出直しよ、直子いいわね」

課長―― 島に丁寧にお辞儀をして岡田を連れて行く逢坂、その際課長に言った。

「岡田さんは 私が責任を持って一人前のオフィスレディに育てあげます。今日からはこの子の

ことは直樹と呼ばないでください、この子は今日から直子として生まれ変わります。」

すべてプログラム通りなのだ、フェミニックで岡田の脳内の海馬中枢の記憶を完全に性同一障害者

の記憶に書き換えてしまったのだ、このまま彼女等にフェミニックマシンで教育され続ければ

完全に女性化し、将来的には家庭の妻となり生涯を終えることになるかもしれない。

開発営業部の同僚、宮内と風間も岡田の変わりように驚いていた

「2 課に人事で出向になった男性社員は皆オカマにされちゃってあげく

性転換して本物の女になって結婚しちまった奴もいるんだと、」

「姉ちゃんばっかいて時々羨ましいけどよ、オカマにされたあげく

に、男と
なに しなきゃなくなるのは堪らんな。」

二人の話しているデスクの横を通り過ぎる岡田、もちろん女性用の制服に

身を包み、ショートボブのヘアにナチュラルメイクをしている。自分のデスク

に忘れた書類などを取りに来た。

「よっ！岡ちゃん、いやオカマちゃんかな？」宮内がからかうように声をかける

睨みつける岡田、宮内も心なしに興奮して岡田の行く手を塞ぐ、

「どいてよ、やらしいわね」

「よせよ！宮内、岡田も理由^{わけ}あってああなったんだ、からかつては失礼

だぞ、ちゃんと女性として接するよう社長からきつく言われているだろ。」

風間が制止した、

宮内は寂しかった、以前なら大声で名を呼び合い、馬鹿なジョークで1日盛り上がる

ことのできた親友岡田はもうここにはいない、これから素敵なOLライフを目指す

女性化への道を歩む青年岡田がそこにいる。

帰り際の岡田を後ろから ” 膝かつくん ” を仕掛ける宮内、よろける岡田

「てめっ！こら。」

一瞬男言葉がリアルに戻る岡田、少しまだ男が残る岡田に幾分男に

戻るのでは

という期待が湧く宮内、

「ほら、やっぱり、まだ昔の岡田のまま、短気な男気が消えてねえ！戻ってこいよ

岡田、そんなかつこお前には似合わんぜ、理由あつて、させられてるんだろ？

なあ そうだろ？」

「今の言葉は わたしのことばでは・・・」

時間のかかる岡田を菅野が心配して迎えに来た、

「何か 言われたの？こいつらに？」菅野は宮内と風間を睨み付けた。

潜入

1

「今の言葉遣い 駄目でしょ、直子、気をつけなさい」

菅野は岡田を叱った

「ハイ、ごめんなさい菅野さん。」

素直に謝る岡田、

「今日は2時間フェミニックマシンをした後、私に付き合いなさい、いいわね直子」

菅野はフェミニックマシンが使用頻度の高いために少しプログラム装置が劣化を

きたしているのを危惧していた、その為、直子を予定より早く性転換させねばならな

かったのだ、その為2課が密かに開発してきたフィメールシャワーという装置で多量

の女性ホルモンを粒子と化し直子の全身に照射させ、女性化乳房にして意識を

より女性化させてしまおうという算段だった。

菅野は言い含めるように岡田に言った。

「もう、あの宮内とか風間という男とは口をきいては駄目よ、いいわね」

その頃、岡田の自宅マンションは中山達2課の女性達によって完全に女性使用の

部屋へと変えられていた、クローゼットの中の男性物の服は全て処分され変わりに

女性ものの流行のワンピースや、ショートパンツ、ブラウスなどが入れられた。

靴、下着、壁の色から 食器に到るまでトータルに変えてしまい、女性化の意識を高めさせる為だ、

、2課が設立されてからというものの2課に人事で移動になった男性社員は何故

突然意識が変わったように女性化し、性転換してしまったのか、宮内はかねてから

疑惑の2課の内情を探る名目で課長 島に2課の出向を申請した

「俺も薄々この会社内の新たな勢力に危機感を感じていた、それも相手は女性だ
彼女達の真の目的は 俺達男性社会を逆転し支配することではないのだろうか

現在我が社の女性社員の比率は95パーセント近くになるうとして
いる、社長はいずれ

は男性社員を排除し女性だけの会社にするやもれん、宮内、危険だが2課に潜入して

彼女等の正体を暴いてくれ頼む。」

再び2課の製品実験室に連れてこられた岡田は上半身を裸にされ、手術台のように

なった寝台に仰向けにされ拘束されていた。

天井からは無数の細い針金のようなものが付いたアンテナのような機器がコードに接続され

寝台を覆いかぶさっていた、菅野は機器を操作する操作パネルの側の椅子に腰を下ろした。

「痛くないから、心配しないで、むしろ、今まで経験したことのない絶頂感というものが体感

出来る筈よ。とっても気持ちよくなっていくの、オルガスムスを極

度に高い値で体感させる

ようになっっているから、いい？　いくときには　どう言つかわかってるよね？、直子」

「はい、いくゝって言います。」

「いいわよ、直子、いくゝゝゝゝって長く展ばして言ってもいいからね」

「じゃいくわよ」

無数のピンクの光の粒子が岡田に照射された、粒子は岡田を包み込み岡田の全身を怪しくピンクに

輝かせた後、岡田の体を全体的に丸みを帯びた女性らしいラインに変えていった、髪も10センチほど

伸び柔らかくなり岡田の首筋から肩までを髪が覆った。次第にオルガを感じていく岡田、

「いくわっ！、いくゝゝゝゝっ！」

「まだよ、まだいっっちゃ駄目よ直子」

胸元に緩い傾斜の山が二つ形成され思春期の女性くらいのバストが形成された。

「どう？変わったあなたの姿を姿見で見てご覧」菅野が移動できる姿見を岡田の横へ持つてくる。

緩くカーブを描いた上半身のライン、そして初めて体感するバスト、全身が性感帯のように

敏感に変わったのを感じる。

「乳房が少しちくちくするから、このエストロゲンクリームを定期的に塗るのいいわね」

少し手に取ったくりーむを岡田の乳房を撫でるように塗りこむ菅野、
「あゝゝん。」

宮内の2課への出向は簡単には受理されなかった、粗野で乱暴な氣質のある

宮内はイマイチデリケートな女性にはウケが良くない。向こうのほう拒否して

いる以上出向はできない、焦る宮内、このままでは岡田は性転換させられて

しまうだろう、しかし、意外にも2課の逢坂から新作ソフトのデモ体験を宮内に依頼してきた。

「うちの2課の活動に感心があるようなので新作ソフトのデモ体験をさせてあげるわ」

逢坂はいつになく女性らしいオフホワイトのミニのスーツで現われ宮内を誘った。

「2課の製作する女性向仮想ソフトには前から感心があります、是非参加させてください」
バーチャル

2課の製品実験ルームに逢坂と共に入室する宮内、室内にはまだ実用化されない
見慣れない装置などが溢れ、研究費を多額に社に請求する2課の実態に脅威した。

バイクのフルフェイスヘルメットを思わすヘッドセットや最新の端末機器が並んでいる
ヘッドセットを手に取り逢坂が宮内の下へと寄ってきた。

「仮想フリーセックスライフ というソフトよ、このヘッドセットを付けるとソフトの中の
キャラクターとソフトの持ち主のカスタマーが一体化するの、ソフトのキャラクターは
タイプも職業も年齢も、好きな体位も男性の好みもすべてカスタマー自身で選択
可能なのよ、 団地住まいの主婦で亭主が単身赴任でなかなか帰らないので欲求
不満になり、男をあさるキャラとか、レズに走るキャラとか、体感時間は30分
30分を経過したら自動的に本人が覚醒して目覚めるようにタイマーが付いているので
安心よ。」

「じゃ、お借りして自宅で体感させて・・・」
そこまで言いかけた宮内の背後から携帯用の催涙スプレーのようなものを鼻腔近くへ
吹き付ける、逢坂、。
「あなた、防犯カメラでこの実験室の使用状況をチェックしていたわね、お見通しなのよ
お望みどおりソフトを体験させてあげるわ、タイマーをオフにして、1時間以内に覚醒
できなければあなたはソフトのキャラと一体化するのよ、ふふふ。」

仮想セックス体感ソフト

宮内 章雄 26歳 企画営業課社員は逢坂 由美の陰謀により仮想セックス

体感ソフトを装着され、自我が次第に消失しつつあった、宮内の意識はソフト

内のアバターと呼ばれる仮想キャラと同一化するように設定されるため次第に

ソフトのキャラへと意識が変化していく、逢坂はフルフェイス型ヘッドセットを被せられた

宮内の横の操作パネル前面のモニターを眺めている。キーボードを打ちながら宮内の

アバターを設定していく。

名前、吉永 玲子、年齢24歳 既婚、複数の男性とのセックス経験あり、好きな体位

プロポーション など、順に設定していくとモニターに映る宮内の画像が美しい人妻へ

変化していく。シナリオ設定を選択し、彼女のこれからのセックスライフも入力する。

宮内は、既に玲子と化し、主人優作のいぬ間にパート勤めで知り合ったスーパー店長

加藤嘉男と自宅でひっそりと情事をかさねている。

「いいわっあんっ 嘉男さん、もったときつく玲子を抱いて」 快楽の頂点を求める宮内（玲子）

だが、いくらか残る宮内の意識は快楽の淵で迷いをみせる。

”このまま、抱かれていたい、とっても気持ちいい、かつてない快感、相手は男だけど

何故だか愛しい、彼が、不思議だ、相手は男なのに、抱かれない、
もっと抱きしめられ
彼から愛されたい、もう、どうでもいい、男なんてやめてしまおう
か？このまま彼の女で
いたい、”でも、オレは男ではなかったのか？”

宮内OLになる。

1

「宮内さん、目を覚まさない」
ヘッドセットを外された宮内、既にマシンを装着されてから1時間が経過していた

「どう？気分は？すっかりオルガに達して、もうあなたは男なしではいられない性の虜よ章子。」

逢坂由美は宮内の着ていたスーツ　ズボンの代わりにシルクのブラジャーとパンティを着せた
そして、内牧にカールせたセミロングのウィッグを被せる。

「君も今日から2課のオフィスレディーよ、頑張りなさい」

「とっても　素敵でした、バーチャル体験、ありがとうございます。
由美様」

岡田が宮内に駆け寄ってくる。

「おめでとう、章子、そう、今日からあなたは章子になるのよ、お互い素敵なおフィスレディー
目指して頑張りましょう。」

岡田の手を両手で握り締める宮内

「よかった、わたし直子がいなくなって寂しかったの、これからは一緒よ。」

「章子の制服ももう用意してあるわ、こっちへ来て」

「さっここに座って、目を閉じているのよ章子」

白い化粧用ケープが首から前を覆った。

菅野、中山の手助けも入り、メイクを施され、ネイルを塗られていく宮内、

「眉毛も細く女性らしい優しい雰囲気になりましたよね、ちょっと痛いよ、」

毛抜きで宮内の眉毛は抜かれファンデで隠されたあとを細いペンで新しい女性的な眉を描かれた。

ルージュを手にした菅野が宮内の唇をローズピンクに染めていった最初は少し戸惑いの表情を見せたが、やがて満面の笑みをこぼす宮内、だが心の

淵にある男の宮内が歯止めをかけようとする。

”おかしくないか？自分、化粧されて嬉しいのか？”

菅野は只横で楽しく宮内を美しく変えていく。

「どう？女つて素敵でしょ、ふふふ」

あくる日

ミニのワンピース姿で出社した宮内、ウィッグを装着しセミロング、爪は真っ赤な付け爪

になり、ナチュラルメイクで完全なOLスタイル、社のほうには既に逢坂が連絡してあり

性同一障害者の扱いで宮内は扱われることになり、正式に2課への出向も決っていた

真っ直ぐに女子更衣室へと向かう、もちろん女性扱いとなった宮内の事情は社内の女性は

全て知っていた。だが、時折、少なからずも残っている宮内の男としての精神がためらい

となつて宮内の行動を抑止する。女子更衣室の扉の前で足が止ま

る 宮内、

”この 扉を開けて入れば もう後戻りできないんだぞ、章雄、まだ間に合うぞ、

戸惑う宮内の肩を叩いたのは2課の逢坂由美だ、

「なにを戸惑っているの？宮内さん、あなたはもう2課の一員よ、いまさら企画営業1課には

戻れないのよ、さつ、いらっしやい、」宮内の手を引く逢坂、

そこを偶然通りがかったかつての同僚、風間は宮内の変わりように驚く、

「宮内、まさかお前まで・・・？」

風間にいきさつを話して助けを求めようとする、宮内、しかし数名の2課の女性が強引に

宮内を肩から押して更衣室へと引き込んでいく、

「風間、あのな・・・」　そこまで言ったが更衣室に強引に引き込まれ扉が閉められた

更衣室の中へと押し込まれた宮内、逢坂の平手が彼（彼女）の頬を打つ。

頬を押さえて蹲る宮内、

「まだ、踏ん切りがつかないようね、宮内、わたしがはっきり決心つけさせてあげるわ」

宮内を抱き寄せ強引に唇を奪い、激しいディープキスをする逢坂、唾液が糸のように

宮内の唇から逢坂の唇をつなぐ

激しいオルガスムスが宮内の　脳に反応する、それは宮内の心の中に新たに芽生え

はじめた、小さな乙女心、涙が頬を伝わっている。それは逢坂に対して自分の否を

認め、服従するという意思表示でもあった。ハンカチで頬に伝わる涙を拭う逢坂。

「いいのよ、もう、章子、最初は誰も戸惑うわ、でもすぐに気づくの、選択すべきはどちらが

正しいかって、章子はもうわたしにとってかわいい　妹のような存

在なの、かわいがって
あげるわ、それともあんな野蛮で下劣な連中の仲間に戻るの？」

逢坂は宮内を姿見の前に連れて行く。

「、レディーの身だしなみよ、章子、口をつむりなさい、そう、いい娘ね」

目を瞑り、唇を瞑って従順になる宮内、まるで意識を支配されたように、

「綺麗になろうね、章子」

逢坂は、宮内の唇にピンクのルージュをひいていった

2

「宮内は、少しフェミニックマシンで教育して、もう少し2課のオフィスレディーらしく

なってもらうわ、それからフェニシングスクールの特別コース、男性から女性へを

受講させます、ほとんどの男性社員をあれで墮とし、レディーへの道に進ませた

実績もあります。確実に女性化させてあげましょう」

逢坂由美は 始業前のミーティングで皆に告げた、そして着実に女性化への道を

進む岡田を呼び出した、

「岡田、乙女クリニックの予約入れました、来月の10日から2週間、ちゃんと処理

してくるのよ、いままでのあんだとは決別するのよ、いいこと、これが終われば

心身共に私たちは同士、なんの気兼ねもいらぬ真の女同士になれるのよ、

費用は、とある機関から予算がでていて無料だから心配いらないわ、先輩達も

皆経験して通ってきた道だから、結婚して素敵な奥様になって幸せになった娘

もたくさんいるわ、ほとんどの娘が”かわってよかった”と実感しているわ

社の大半の男性を女性化していつて、ゆくゆくは女性だけの会社にするって社長

の方針らしいの、実は密かに男性社員を罠にかけ女性化への道を歩ましていたのは

社長の意向だったの、おかげで私達2課の女性は会社内でもトップの地位につくこと

ができたのよ。”

岡田に小さな包装紙に包まれた箱を手渡す逢坂、

「これは、あんたが処理が終わって、新たな道を歩み出す時に使う女にとってとても

大切なものよ、女には誕生日の他にもうひとつ誕生日があるのよ、そのときは自分でも

信じられないくらい理性の歯止めがきかなくなって乱れてしまうんだけど、女にとって

とても素敵な日でもあるの、ある意味成熟していく過程での女のケジメみたいなもの

なのよ、体のダメージもあって苦しいけど頑張るのよ、以前は手術ではここまでわたしたち

純女と同じ状態にはなれなかったの、だから処理が終わってもこの誕生日だけは経験

できなかったの、それが彼女達のプライドを随分傷つけたんだけど、今の手術では

完璧にコピーしたかのように同じ肉体になれるのよ、素敵でしょ？だから妊娠もできる

し、以前のような差別はないわ、女性は寛大だからあなた達を同士として受け入れ

る体制は整っているわ、実は政治的にも女性増加プランというのが進行しているの

とある、女性議員のバックがあって、密かに、やがて日本の人口の8割は女性となる

予定らしいわ」

箱と一緒に化粧ポーチに入った化粧品のセットも岡田に手渡す逢坂、「えっこれも？いいのですか？」

「女は常に身だしなみよ、直子、常にコンパクトで自分の顔を見て肌の変化に対応

するのよ、口紅とパクトは常に携帯するの、あんたはまだ、直樹だった頃のズボラな

癖が残ってるから化粧品も揃えてないし、これからはもっと自分を美しく演出することを

こころがけなさい、女性誌とかももつと読んで美容やメイクに感心を持つこと、いいわね」

巨大な陰謀

1

風間は社内の男性社員の減少化、それに伴い増加する女性社員という状況に幾分

危機感を感じ、上司 島に進言した。

「おかしいですよ、最近、2課へ潜入した宮内君も今では和服姿で髪を結って今日も

日舞のお稽古してますよ、彼もすっかり和服美人になってしまった、岡田君は岡田君で

チャーミングになって2課の女性たちとショッピングに出掛けたり、エステに行ったりして

楽しそうですよ。 どうなってるんですこの社は？」

島はCANCANを読んでいた、爪をネイルにし赤く染めて、髪も少し伸ばしピンでサイドに

ながしてとめている、女性のように、あっけらかんと島を見る風間、

「課長？まさか課長まで、そんな1課で唯一男性だった僕と島さんだったのに何故？」

島は薄化粧をした顔で風間を見て言った。

「風間くんたらっ いやね、まだ、こだわってるの？、男のプライド？ 捨てなさいよ

そんなもの、彼女達のことアタシ、買いかぶっていたわ、とてもデリカシーがあつて

繊細で、センスもあるし、あっちのほうも、性感帯自体が男性よりも敏感、女同士

でも、すっごくいいのよ、あなたも一度体感してみなさい、フ
エミニックマシン」

「やはり、そうか、そうだったんだ、この会社だけではない、日本
中の各地で女性化
する男性が急増しているんだ、これは男性を不要とする女性の反乱
なのだ、

彼女達は既に男性意外のものに性の対象がいつているのだ、バーチ
ヤルセックス

マシン、それは男性との性交渉以上の快感が得られて抜群に若い女
性のシェアを独占した

既に彼女達にとって俺等は不要、性交渉なしでも人工授精マシンも
進化している。

俺たちは彼女達と同士になるか、もしくは授精用に飼われて精液の
み採取される

家畜となるしかないのだ、オレは嫌だ、家畜になるのも、彼女達の
同士になるのも

ゴメンだ、俺はおれでありたい、あんたとは違う！」

風間はあたりを見渡し、できるだけはやく外に出られる通路を捜す。

島はデスクの内線電話で警備を呼んでいた、もちろん警備員も女性
だ、

「すぐに来てくださる。そう、企画営業1課の部屋まで、へんな男
の子がいるのよ

処理してくださる？おねがい」

普段は開かない非常扉を全身で体当たりで開ける風間、そして通路
をしばらく行くと

非常階段へとつながった。

、全速で階段を降下していく風間、” 奴等に捕まれば確実に処理される”

風間は焦った、既に社内には誰一人彼の味方はいなかった。

非常ベルが鳴り響く15階建てのBACのビルの非常階段を風間は必死で駆け下りていた。

2

風間は逃げる。そして逃げる風間を追う女性ガードマン、ガードマンの女性は3名、彼女達は防弾ベスト、特殊警防、そして肩からホルスターを下げ、電磁パルス銃を所持している。

風間は1階まで辿り着くと、全てのセキュリティを操作する玄関口にある制御盤を開き

内蔵されているロムをライターで炙りコンピューターを誤作動させ、全ての自動防火シャッター

をおろし、敵の追撃をとりあえずかわした。防火シャッターの前で立ち往生する女性ガードマン

風間はエレベーターダクトをつたい、地下まで降りると駐車場の数台の車の中から馬力のいい

レンジローバーに目をつけ、サイドウィンドを側にあつた縁石で破壊し、車内に入りこみ、イグニツ

ションの配線をプラスマイナスでスパークさせてエンジンを点火し始動させた、鳴り止まないセキュリティ

アラームは配線を引きちぎり止めた。地下駐車場も巨大な防火シャッターが出口を塞いでいたが

それをレンジのスーパーチャージャー4・2リッター390馬力のパワーで破壊し、突破した。

駐車場周辺には既に警官隊が配備され、風間の逃げ場はないかと思われたがそれは杞憂だった

レンジのトランスファアを4Lに入れフルパワーでパトカーを弾き飛ばし、封鎖線を突破しレンジは

進路を北へと走り抜けた、後を数台のパトカー、そして上空からヘリが追った。

全国に風間悟郎は指名手配となった、もはやどこへ逃げても敵ばかりの風間、

既に警察組織、防衛庁、そして議事堂までが女性たちの支配されるものと化していた。

それは瞬く間に全国に広がった女性たちの反乱、発起人は女性だけで組織された

政治新党、みゆき会の女性議員 建部 美由紀達 女性議員達だ、

みゆき会は民主党、共産党

などと合併した後、急成長し、いつのまにか3党の中心となり、建部は新総裁となっていた、

女性総理の誕生、それは男性達に虐げられてきた女性たちの反乱の序章だった、BACの逢坂は

みゆき会の建部 美由紀とは水蜜の仲で彼女達の間で女性による国家支配論ができあがり

それは着実に実行されてきたのだった。 みゆき会は全国の支持者公聴会で男性不要論を

提示し、それは全国の女性達を驚喜させた。

逃走

1

街のとある化粧品店、男が女性用化粧品を幾つか手に取っている、店員の女性が気を使い声をかける。

「あの。よろしかったら、基礎化粧品から揃えましょうか？初めてでしたら　ウチのほうでメイクしてさしあげますよ、さ　ご遠慮なさらず」

男性が女装する。そして性転換への道を歩いていくのは既に彼女達には常識の概念があった、むしろ

普通に男らしい男　純男こそ彼女達には異例なことだった、

「いいの？お願いできるかしら？」

すっかりオネエ言葉の男、彼は逃走中の風間だ、彼はそのまま逃走を続けるにはあえて女装して敵の

追撃を少しでも逃れるしかないのだ、彼はパトカーの追跡はなんとか、かわしたが指名手配となった今

今のままではあまりにも敵にわかりやすい、いつそのこと、去勢されて女性化しているフリで逃げるほうが

安泰なのだ、勿論、彼の本意ではないが・・・

「どうぞ、こちらへ」女性店員は店内にある美容用の椅子へ案内する。

素直に椅子に座る風間、もはやこれ以外とれる策はない、

「じゃ、ケープをつけますね」

白いフリルの入ったケープが首から前を覆う、これが男である風間には屈辱だが、

「少し、肌の様子を見るためパッチテストしますね」

肌質を確かめる、リトマス試験紙のようなものを用意し、肌にあてがい反応を見る店員、

「少し 乾燥肌で 水分が足りないですね。保湿美容液で手入れしますね」

コットンに染み込ませた美容液で風間の顔全体を優しく叩いていく店員。

店内の少し奥にいる店員が風間の顔を見てテレビに映る指名手配の風間と同じことを確認しているが

姿見に映る自分の姿しか目に入らない風間、奥の店員は風間の側にいる店員を呼んだ。

「ちょっと、由香里さん いいかしら」

「はい、ごめんなさいね、お客様ちよつとはずします」

店の奥へと消えた店員、風間は少し警戒心を感じ、席を離れようとした、だが行く手をもうひとり出てきた女性店員が塞ぐ、

「お客様、少々お待ちくださいませ、今終わるのはまだ気の早いことですよ、女は綺麗になるためには少しの辛抱もいとわなくては駄目ですよ」

「いえ、ちよつと急ぐので」風間は女性の制止を振り切ろうとするが、店の奥から更に数名の店員が出てきて風間を取り囲んだ。

「風間悟郎様、自ら私共、BACの傘下チエーンBBYに足をお運びくださいまして光栄ですわ、お話は逢坂さまより

窺っておりますわ、もし現われたら、丁寧な対応で処置し、風間様をより美しくしてさしあげてとのこと、このまま

帰られては困ります」店の店長らしき女性がそう言うと、他の数名の女店員はスプレー缶を出し、風間に催眠ガスのようなものを吹き付けてきた、

「すぐに気持ちよくなつてきますわ風間様、少し素直におとなしく

従順になっていただいて、私共の施術により
美しく生まれ変わって、新たに女としての素敵な再スタートをしま
しょうね、」

ガスを吸い込み意識が遠のいていく風間、特殊なガスは風間の男と
しての意思を従順な女らしい意思へと変えていく。

2

紫色のバレエ用のレオタードに身を包み、髪をシニヨンにし、美容
椅子に座る美しき女性

ルージユを女性店員にひいてもらっている。ベースメイクをしつか
りとし、白いリボンの

髪留めが、女性らしさを引き立てている。脚を内股に揃えて膝の上
で両手を重ねているその

姿は、抵抗心を奪われ、従順になった風間悟郎の姿だった。

「さっ、とても綺麗にメイクも仕上がったわ、風間様、もうじき逢
坂様がお迎えにみえますから」

言葉も失ってしまったのか風間は笑みをつくり、女性店員にうなず
くだけだ、だがしかし心根
にはしっかりと風間 悟郎は残っていた

”この怪しい媚薬のようなガスはオレの精神から抵抗心を奪い、従
順にさせる一種の精神
ガスだ、脳内のオレの男性遺伝子にショックを与えて、遺伝子異常
を発生させて女性化

させようというんだろ？が、お見通しだ、既に対抗すべきワクチンを接種しているオレの心根は変えられない”

「とても、しおらしく、おしとやかになられましたわ、逢坂様、まだ実験段階のフェミンガスですけど

効果的に作用してます。持続性がないので効果が続かないのが欠点ですけど、抵抗心を奪う

のでメイクを施したり、お洋服を変えるのに役立ちました、あとは教育次第ですわね

肌の具合もよくて、化粧栄えのする風間様はやはり完璧にフィメイルされたほうがいいですわ」

電話で逢坂と女性店員は話していた、逃げようにもこの姿では、あまりにも目立つ、風間は

とりあえず様子を伺って行動するしかない、

店長らしきその女性は再びスプレー缶を手に風間の元へ戻ってきた

「効果が、なくなる前にもうひと吹きしておきましょう」

再びガスを吹き付けられる風間、対抗薬を飲んではいるが、いつまでもそれは効果がない、

女性的な精神が風間に押し寄せる。

”綺麗、とっても綺麗だわ私、でももっと綺麗になりたいわ、綺麗になりたい、綺麗に綺麗に・・・”

やがて迎えに来た逢坂由美の車に乗せられた風間、ガスの効果で抵抗がない。

「名前を変えましょうね、風間さん、悟郎なんて趣味の悪い名は今

日でおしまい、今日からは

裕美にしましょうね、さっ 裕美 ルージユをひきなおしてあげる、
こっちを向いて、そうよ

瞳を閉じて、いい娘ね、綺麗にしてあげるわ」

まどろむ目で逢坂を見つめ、しおらしく、されるがままに風間は逢
坂にルージユをひかれた、

屈辱のバレエレッスン

1

助手席で眠りについた風間の頭部にヘッドセットをはめ、車のナビのモニターをPCのモニター

に切り替える逢坂由美 モニターには風間の脳の海馬中枢がグラフィックの断面図で表示

される。緑色と赤色に識別された脳の断面図、赤い色は女性化した女性脳、緑の色は男性

脳 風間の脳は45パーセント男性脳のままだ、強靱な男性のDNAが脳内に存在し、風間の女性化を抑制する。

「やはり、わたし達を欺こうと去勢されたフリをしている。彼のDNAは危険だわ、とりあえず

SISSYを与えて、強制的に染色体を変化させなくては」

それは男性に存在するXY染色体を脳内に特別な刺激を与えて、錯覚を起させる一種の

幻覚剤ドラッグで 染色体はXY染色体のままなのに脳はXX女性染色体に変化したように

反応し、元々自分は女性だったと思い込んでしまう危険なドラッグだ、 由美はそれを口に含むと

口移しで風間に服用した。車はしばらく走ると雑居ビルの前に止まった、3階建てのビルの3階の

看板に前田 瑞穂バレエスタジオと書いてある。由美はドラッグが効いて半ばトランス状態の

風間を連れて、雑居ビルの3階のバレエスタジオへ向かって行った。

2

軽やかなチャイコフスキーのクラシックのメロディに合わせて10代から30代までの女性がスタジオ

壁に面した姿見を見ながら、それぞれ淡い色のレオタードに身を包みバーにつかまりレッスンを

している。軽やかに腕を振り、爪先で立ち足首をばねの様に上下させ踊っていた。皆うなじから

汗が光るほど熱中している。講師の前田瑞穂は28歳、見事に無駄のない細身の上半身、そしてやや

太目の脚が特徴だが、それはバレエダンサー特有のものだ、前田は黒のレオタードの上から

白いレースのカーディガンを着て由美達の元へ現われた。

「由美、久しぶりね、踊りにきたの？大人の部は午後からだけどどうする？」

「この娘 ヘテロなの、これから教育してフィメールさせるんだけど、ちよつと癖のある娘で」

「バレエは女性の情操教育にもいいのよ、うちでしばらく面倒見てもいいわよ」

「じゃあ私と同じ大人の部でお願いします」 由美は瑞穂に丁寧

にお辞儀すると風間を連れて

更衣室へと入っていった、風間はSISSYの効き目で由美の妹のように従順になり由美の手を

しっかりと握り締め、由美の胸元に頬を寄せて甘えた、

「裕美、いい娘になったわね、でも乙女クリニックの予約がいっぱいであなたをフィメール

できないのよ、しばらくヘテロのまま辛抱するのよ、

ヘテロとは準備段階の女性化希望男性、フィメールとは完全に処理を終わり肉体的にも精神的にも女性化した男性のことだ、

3

風間は踊った、由美たちと共に、汗がうなじにひかり、胸元にも汗が染みた、脚をばねの様に屈伸させて

時に爪先を軸に回転し弧を描いて美しく舞った。周囲の女性も関心の眼差しを寄せる。フロアに汗が滴り落ちる

そんな風間を休憩時間になると由美は優しく抱き寄せ、髪や胸元の汗をタオルで拭った。

「いいわよ、裕美、体のキレも綺麗になったわ、もう少し表情を豊かにするのよ、それも表現だから。」

「はい、」素直に返事をする風間、次第に今までの脳内に脚を張っていた男気が薄れて、新たに乙女心が芽生えようとしていたが、レオタードの下にハッキリと残る男としての証が抑止効果になり、男であった

風間の記憶を呼び戻す。

「やっぱり、こんなの自分じゃない」、股間のある男根に触れるたび今の自分に嫌悪感が起こる。

「いつの間にかこうしていることに違和感がなくなっていたが、元々こんなことする自分じゃない、何かの力で

操られて自分を無くそうとしているんだ、こんな自分に浸っていては駄目だ、すべて逢坂由美の仕掛けた

罠、このままでは自分の意識を無くして、バレエを楽しみ、陶醉す

る女性になつてしまう”

風間の微妙な意識の変化を逢坂由美も見逃さないでいた、SISS Yの作用でどうしても由美には逆らえない

風間はこのまま由美の目を盗んで逃げ出そうかと模索していた。

風間の耳元で由美は囁いた

「もしかして股間にあるもの、邪魔じゃないかしら、裕美、悩んでるんだつたら楽にしてあげるわよ」

ゾツとした表情で由美を見返す風間、だが由美は再び怪しいガスを含んだ携帯用スプレーを風間に吹き付けた

「あつああゝん」 胸に手をあてて少し悶えて内股になり一瞬でしおらしくなる風間、

「裕美、あなたもまだ踏ん切りつかないようだから、決心つけさせてあげるわ、股間のものを簡単に処理

できるわ、乙女クリニクにいかなくてもわたしが処理してあげる」

周りの女性も皆で風間を押さえつけた、身動きできない風間。

「ここのバレエスタジオに来る女性は皆独身女性なの、知らぬ間に私たちは性欲の処理の為皆水蜜の仲になつていたわ、

あなたも、体験させてあげるわ、ピアンの泉を、女同士だけが得られる甘い 甘い泉を」

女性たちにレオタードを脱がされ、代わりに純白のベビードールを着せられる風間

「さつ、皆でパーティールームに裕美を連れていくのよ」

ピアンの泉

1

風間は女性たちに担がれて雑居ビルの地下室のような部屋へ連れて行かれた。

そこはリビング3つほどの広さを誇る広大なパーティールーム
部屋の中心に大きな浴槽がありピンク色のホルモン剤が浸されているようだ、

そして部屋の隅々にダクトがありそこからお香のような煙が微量に漏れている

ロープで腕を背中側で縛られ拘束された風間は浴槽に落とされた、
溺れそうになる

風間を皆で押さえロープを解く、浴槽にはホルモン剤に混ぜて淫靡な気分になる

媚薬も浸されていた。女性たちに体中を愛撫された後解放され、浴槽から出る頃には

風間も怪しく淫靡な気分に浸っていた。10名ほどの女性がパーティールームに入った

が皆服を脱ぎ捨て無垢の姿に解放され豊満な肉体を互いに愛撫しはじめた、部屋には

ソファが4つほどあり、それぞれに皆パートナーを二人から三人連れて満たされぬものを

求めあった、風間は一人取り残されてしまい、呆然としていると背後から黒いレザーの

ボンテージに身を包んだ由美が現われ、ソフトSM用のムチを風間の臀部へ振り下ろした

微量の痛みが一瞬走る風間、しかし、それは風間が密かに持つM性

に心地よく反応した

女性ホルモンの浴槽にしばらく浸かっていた影響で風間の男根は威厳をなくしたように

縮こまり、ただその存在がやっと確認できるほど小さくなっていた、
「シストウ・・」由美が風間の耳元で囁く

少しベそをかく風間を平手で叩き伏せると、ヒールの踵で風間の男根を踏みつける

痛みにあえぐ風間、しかしM性の悲しさか少し悦も入っている。

「ああっん いいつもつと責めて。」

「そんな中途半端なものあるからオマエは情けないんだよ！シストウ！」

風間の首根を押さえつけ強引に自分の乳房に引き寄せ愛撫をさせる
由美

「そうだ、そう、上手だよ、裕美、裕美もこんな胸が欲しくないの？」

その返答にはやはりまだためらいの返答が正直にでる風間

「その、自分、やはり男ですから・・・」

「やはり S I S S Y の効果もたいしたことはないか、じゃあいい返事をできるようにしてあげるよ」

由美は部屋の壁のスイッチを押すと壁の一部が引き出しになって中からお香

のようなものを詰めたキセルがでてきた。

キセルを風間の口元へ運び怪しい媚薬を吸引させる由美

「これの効果は絶大なはずよ、幻覚剤としてはもつとも愛好されているビューティフルドリーマー どう？

裕美、世界が変わってこない？」

風間は股間を押さえて涙を流し始めた。

「こんなもの あるから、こんなものが だから・・・」

再び抱き寄せ胸を愛撫させる由美

「どう？おつきくて やわらかい乳房、感じてみたくないの？皆あんなに楽しそうよ」

周りを見渡す風間 それぞれのソファで女と女で秘部を愛撫しあい、皆涎を垂れて

悦に入っている、歓喜の声を漏らすものもいる。

「ああ〜ん、いいわっ洋子の胸、柔らかくて、とつても」

「博子の花弁もすごく綺麗よ」

風間の脳に倒錯の世界があふれ出す。自分だけ仲間はずれ、自分も彼女達と同じように感じたい、愛されたい

彼女達と同じになりたい、今の自分は嫌だ、自分の体に嫌悪感さえ湧いてくる風間、涙が止まらない

「いいのよ、裕美、今の気持ちを正直に気持ちを込めて言ってるん、さあ」

風間は小さな声で言った。

「わたしも大きな胸になって、皆と一緒にになりたいです」

「聞こえないわ、大きな声で言ってごらん」

「大きな胸になりたいです！」

由美は薄ら笑いをうかべて言った。

「女になりたいのよね、裕美ちゃん、自分の体をよく見なさい 裕美ちゃん」

風間は自分の胸を姿見で見た、大きな谷間を作る豊かなバストがそこにあった、自分でも触って感じることができる。

さらに股間に手をやると、今まであった忌々しいものが無くなり、代わりに縦の溝が股間に入っていた、花弁に包まれて、

「嬉しいわ、なんて素敵なんですよ、 おねえ様」
涙が止まらぬ風間。

ソファで戯れる女性たちが風間を手招きしている。

「おいでよ、裕美、一緒に気持ちよくなろうよ さあ おいで」

風間は着ているベビードールを脱ぎ捨て無垢な体で彼女等の裸体に紛れていった

決別

あくる日、風間は由美の車の助手席で化粧を直しながら由美に言った
「なんだか迷いがなくなつたの、不思議だわ、いったいどうしてたのかしら、わたし」

花模様のワンピースに袖を通し髪をカチューシャで止めた風間はすっかり乙女と化していた、

風間の髪を撫ぜながら由美は軽く風間の頬にキスをして言った。

「よかったわ、裕美、裕美らしく戻ってくれてわたし嬉しいわ、乙女クリニクは1週間後に予約とれたから

ちゃんと、前のあなたとは決別するのよ。処理が終わったらバレエの仲間とお祝いしようね」

車がバレエスタジオに着くとスタジオのバレエ仲間の女性たちが出迎えた、

「心配してたのよ、裕美、ヘテロだから、とてもデリケートでしょ、フイメールすれば気兼ねなく話せるようになるから
大丈夫よ、前の下劣な性とはちゃんと決別しようね」

「はやく フイメールして素敵になった裕美を見たいわ、きっとオデット姫の似合う素敵な娘になるんでしょうね」

「楽しみだわ、お洋服とかも一緒に買いにいけるわね、エステや温泉も女どうしになるし」

風間はかつてない感激に震え皆に頭を下げた。

「皆さんにご心配おかけしてすみませんでした、わたし変わります、素敵なフイメールになって・・・」

涙で声が詰まる風間を由美が抱きしめた

「いいのよ、よく言ったわ、正直男気の強かったあなたが、どれだけ変わってくれるか心配だったの、これを

受け取って、裕美、」　リボンで括って包装された二つの箱を差し出す由美。

「なにかしら？これ？」

「これはあなたが処理を終わった時に開けなさい、二つとも女にとつてとても大切なものはいっているの、

わたしからの　ちよつと早いお祝いよ、裕美」

風間は今までよりも楽しそうに、バレエ仲間達とスタジオに入っていた。

蘇る男気

1

風間は1週間後無事処理を終えた。

逢坂由美以下BAC企画営業2課の女性たちは正式に風間 裕美となった風間を歓迎して

2課に受け入れた、久しぶりに岡田、宮内と対面する風間、 宮内も岡田も処理が終わり

フイメールとなりすっかり女性らしく変わっていた、

「風間さん 待ってたのよ、わたしたち、いつ来るかと」

「心配したわ、BACから逃走した時は、ドキドキしちゃった」

「由美さんとは今も 水蜜なの？」

恥ずかしそうに顔を赤らめる風間、

「やだわ、恥ずかしいこと聞くのね、あなた達、まだ、下品だった頃の自分と決別できてないのね
デリカシーないんだから、もう」

「ごめんね、裕美、裕美になったのよね、あなた、もうひとつの誕生日が来るわよ、それはちよつと

切なくて、ちよつと嬉しい女の記念日よ、由美さんから貰った女の子セットを使って処理するのよ
いいわね、」

宮内は現在日舞の名取になり弟子も数名いた、岡田は授産用男子と結婚し子供を授かった後
不要となつた亭主を精子牧場と呼ばれる施設に送り処分した。

風間は性の処理をバーチャルセックスマシンで処理し、時折逢坂由美と水蜜の關係を持っていた

自宅マンションに帰つた風間は鏡台に置かれた由美のお祝いのプレゼントの箱を開けた。

ひとつは岡田の言っていた 女の子セットと呼ばれる女性の生理用品、もう一つは女の憧れ

デオールの口紅だった、プレゼントには手紙が添えられていた

” おねでとう、裕美、これを読むのは処理が終わつたってことだね、これからもあなたは

仲のいい女同士、今まで以上だけだね、この口紅はあなたの決意に對しての私からの心からの

エールを込めての贈り物よ、もし、もしもだけどフィメールになつたことに迷いが生じることがあつたら

これを塗るのよ、あなたに女心を蘇らせる魔法の口紅だから、忘れては駄目よ絶対。
”

久しぶりに戻つた自宅の部屋の片付けを始める風間、部屋の片隅にかたづけ忘れたゲームソフトが

あり、それに目を留めた 戦略シュミレーションソフト、それはかつて風間が 岡田たちと血のにじむよう

な思いで開発したソフト、瞬間、これまでの岡田や宮内、そして課長まで変わってしまった数々の出来事が

フラッシュバックしてくる、それは風間の心の片隅に残っていた男の悲しいまでの怒り、屈辱の全て

まるで今の風間を否定するかのごとく蘇ってきた

2

風間は身につけた花柄のワンピースを脱ぎ捨て、カチューシャもはずし、イヤリングから

付け爪に到るまで、全ての女性の装飾品を取り払って下着だけになった、

「何してんだよ、俺!？」

姿見に映る自分の姿は髪をシニヨンにし、眉を抜かれ代わりに薄くゆるいカーブを描かれた偽の眉

若く美しい肌を保つ為に塗られたファンデーション、愛らしい表情を作るためのチーク、

女子力アップとかいう濃い目のアイメイク、無垢な乙女心を演出するフリルのついた下着

そして女であることの証である二つの膨らんだ胸、どれも自分が望んだものでわない、

だが、股間にあった男根も消えうせ、代わりに盾に入った溝が戻れぬ性を明らかにしている。

「このまま、素敵なOLライフをエンジョイしろってのか?馬鹿にして!」

風間の脳裏に逢坂由美が浮かんだ、腹立たしさが押し寄せてくる。

すっかり乙女の城と化した

部屋をむちゃくちゃにした、かわいらしい乙女心をくすぐる人形や縫いぐるみもゴミに捨てた

山ずみになった女性誌CANCANやANANも破り捨てた、クローゼットの中のフェミニンなワンピース

の春物も切り裂いて捨てた　そして最期に鏡台に並ぶ女性好みの香りのするフレグランスや化粧品

アクセサリーもゴミ袋へいれていく、一番最後に手にしたのは由美にプレゼントされたディオールの口紅だったが、何故か自分の意思に反してその口紅を捨てられないで握り締めている自分がいた

「何をためらってるんだオレは」

そのままゴミ箱へ直に捨てようと鏡の横を通りすぎようとすると、鏡の向こうに涙を浮かべた女の自分が映った、その鏡の向こうの自分が 自分に話しかけてきた。

「それを捨てるの？女の魂よ」

そして次々と由美やバレエスタジオの仲間の言葉が風間の中のもう一人の風間に語りかける。

”綺麗ね裕美” ”仲良くしましょうね” ”心配したわ裕美”

そして由美の言葉がトラウマのように蘇る

”迷った時は 忘れないで、女心を蘇らせる魔法の口紅よ”

もうひとりの風間が素直にその言葉を受け入れたのか、風間は鏡台の前で口紅を引きはじめた

鏡の向こうのもう一人の風間が微笑む。

おかえり、裕美

おわり

蘇る男気（後書き）

最期まで読んでくださりありがとうございます。

かなり突飛なストーリーであきれ返った読者さんも多数みえるでしょう

ラストは意味深ですね、いろんなとり方ができると思います。

いろんな感想がいただけると嬉しいです。

とりあえず、一番最初の投稿で早速みなさんのご意見が伺えてとても嬉しかったです。

次回も摩訶不思議なストーリーを投稿しますのでお楽しみにでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0232i/>

フェミニックマシン

2010年10月10日15時58分発行